

JADI 原稿案 平成 29 年 3 月

## 「対馬」にみる離島防衛の困難さ

防衛懇話会 会員 須川 薫雄（しげお）

はじめに：

昨年末、防衛懇話会研修で陸上自衛隊第四師団、航空自衛隊春日基地への訪問があり、その後、2泊の日程で対馬を訪問した。

対馬に行ったのは、一昨年来、自衛隊の統合性、機動性が西南の日本国離島対策にあるとの目的を、この島を自分の目で見て、今後の施策の判断の背景理解に役立てたいとの理由であった。対馬においては対馬駐屯地司令、および幹部自衛官、自衛官OBで歴史研究家の小松氏等のご案内でおよそ島の三分の二の地域を回り、有史上の対馬が置かれていた状況と現状と将来の問題点を私の過去10年間の日本の防衛安全保障研究の一環としてまとめたので、報告したい。



対馬の位置関係

対馬の地政学的特殊性：

ご存知のように対馬は日本列島数千の島々の中でも面積は10番目と比較的に大きな島だ。

位置は日本列島と朝鮮半島の海峡の真ん中にあり、有事の際には大変重要な意味がある。南北に細長く、85kmありフランスパンの真ん中を齧られたような形状である。面積700平方km、周辺に有人島をふくみ100以上の島々が存在する。福岡の経済圏だが長崎県で

ある。

ちなみに日本列島からは132 km、朝鮮半島からは約50 kmに位置する。

丁度、台湾太平洋岸のように周囲は多くが絶壁である。上陸できるのは、パンがかじられた真ん中部分、浅茅湾と北の朝鮮半島に近い部分の港など限られている。ほとんどが山林であり、農地はごく限られている。また山林も季節が冬とは言え樹木は貧弱で、見える地肌も豊穡な感じはない。従って現在主要なる産業は漁業である。

北側の展望台に上ると晴朗なる日は朝鮮半島が見える。



横を観れば、高さ百m級の断崖が続いている。

他の多くの日本の離島と同じく、人口は島外に流出して過去7万人（1960年）が現在は約半分32000人になっている。漁業は盛んである。

対馬は古代、半島とつながっていた。縄文時代の遺跡、そして古代、近世における交易の遺跡はいまだ本格的に発掘されてない。偶然に発見された遺物からも対馬は位置の特殊性から日本国内も含め、朝鮮半島、ユーラシア大陸との交易が重要な産業となっていたことは疑いもない。

対馬の歴史的な経過：

古来、日本が倭の国とよばれていたころより、朝鮮半島、大陸との中継点として行き来の交通、交易がおこなわれていた。これが対馬の基本的存在であった。



神社、仏閣が多い

大事件は元寇である。

文永十一年（1274）と弘安四年（1281）の2度にわたり対馬は元を中心とする数十万の兵力の侵略を受けた。防備の兵力は二桁以下の少数で戦力はほとんど全滅し、住民は殺戮と残虐な行為を2度とも受けた。（中世史的視点からみた元寇の詳細、鎌倉幕府の対応とその後省略するが、日本への侵略の原点と言えよう）その後、「倭寇」（川島 真教授によれば定義ははっきりした団体ではない。速水 融教授によれば同じ母親のDNAをもつ東シナ海沿岸の諸民族の集合体）その後倭寇を征伐する意味で李朝の外寇を受けた。応永二十六年（1419）で朝鮮側の対馬船舶の焼き討ちなどもあったが、対馬側も激しく抵抗し、交渉により終結した。

16世紀末、文禄慶長の役の日本の中継基地となった。  
大勢の秀吉が動員した兵士が通過し食料不足となった。





朝鮮通信使図 大英博物館

江戸期においては宗氏が統治、朝鮮通信史（室町時代より続いていた）と言う徳川幕府と李氏の12回にわたる外交活動の役を務めた。18世紀初頭に新井白石がこの通信使による朝鮮との交流を中止した。

それ以外にも江戸期、対馬藩は釜山に倭館の施設を再開し、その広さは10万坪あり対馬より常時600人以上の藩士、島民が詰め、朝鮮との通商、外交に努めた。

江戸期宗氏10万石の石高は九州の飛び地から得ていたことも特記されよう。

対馬は17世紀銀山が開発され栄えた。

18世紀になり島民に銃を持たせ、陶山氏の下、「猪鹿追詰」を実施、島の猪を絶滅させたと言う。（陶山氏の子孫である方が今回の私の見学を手配もしてくれた）

しかし、近年、猪の害に悩まされていると、見学の限り猪による掘り起こしは見なかったが鹿による樹木への被害は頻繁に見た。

この追詰の背景、銃工を渡島させ多量の銃を生産し、19世紀には、農民にいきわたらせた背景はフェートン号事件（1809年）の影響で、少ない武士、救援困難な離島と言うことから、獣狩りを理由とし幕府の許可を得て、島民に銃を装備させたのではないか。これはまだ研究の余地があるが。

対馬の危機：

元寇の2度の侵略を受け、武士は全滅するまで戦い、住民は殺害され残虐な行為を受けた。

それ以外、近世に入ってから、以下のような事件が発生した。



元寇

幕末、文久元年（1861）日本が欧米列強と通商条約を締結したのち、ロシア軍艦ポサドニック号が芋崎に上陸し、井戸を掘り、兵舎を建設し、基地化を図った。対馬藩、幕府の抗議を無視しての行動で、平和裏に解決したい日本側の意向とは異なり住民との摩擦があった。同じく通商条約を締結していた英国のエンカウンター号のロシアへの抗議で問題は解決したが、この150年以上も前の事件にも日本の安全保障の問題の課題は現在にも残っている。「北方四島」問題もその延長線上と考えて良い。

いずれにせよ、日本国安全保障の地政学的な強みも弱みも附属する規模には関係がないが島をひとつでも奪われることだ。占拠されるのは少しの気のゆるみで簡単に行われても解決は大変だ。国家の主権と言う意味で外交、安全保障に大きな影響を与える。沖縄のように一旦、戦闘で占拠された地を平和的交渉で返還された例は有史上きわめて少ない。



要塞化していた時代の

遺跡

日露戦争、日本海海戦は対馬の近辺で行われたので、欧米の資料では「つしま海戦」と

記してあるものがある。

明治以降、日本帝国が朝鮮半島、大陸との紛争があるたびに、注目され、また太平洋戦争中は要塞化された。この要塞、砲台の跡は比較的に良い状態で保存されており、小松氏の説明によれば戦艦の砲を北の港から山上まで持ち上げて、回転砲台として艦艇用の砲と、対潜水艦用の 15 cm カノン砲が装備されていたそう。対馬からの距離、日本列島、朝鮮半島からの砲の射程内で、海峡を封鎖できる能力があった。

砲台の建設は一見しても大変な作業であったことが想像される。港から、線路を敷き、巨大な砲や砲弾、装薬を山に上げて、砲台下に大きな砲が必要な水を貯めるプールや弾薬庫を建



設した。小松 津代志氏

帝国海軍は細長い島を迂回することを効率化するため明治初期に真ん中部分を掘削し運河を建設したので、正確には対馬は2つに分離している。



余談だが対馬要塞の武装解除に来島した米軍の一員にフランク・シナトラが兵としていた



そうである。

対馬の防衛の現状と課題：



対馬駐屯地隊員

（私より日本安全保障の現状研究を一時間ほど聞いていただく）

対馬陸自駐屯地は日本で二番目に小さな駐屯地であり、そのもとに警備隊が存在する。

また海自、空自は独自に北部に警戒監視設備をもつ。

人数的には総数約1 000名弱と推定される。

しかし、距離的には西部方面隊の元にあり、有事の際は西部方面隊の陸・空が、また日本海から東シナ海にかけては海上自衛隊、米国海軍が絶えず機動しているので、孤立感はないと考える。

対馬と朝鮮半島間の海峡は深度があり、潜水艦の航行は比較的多い。



第二次大戦中砲台内部

日本の中規模な島しょう部の中では典型的な存在であり、おそらく防衛省の防衛順位は高いところにあるとおもうが、以下5点の課題をあげたい。

具体的にやることは：



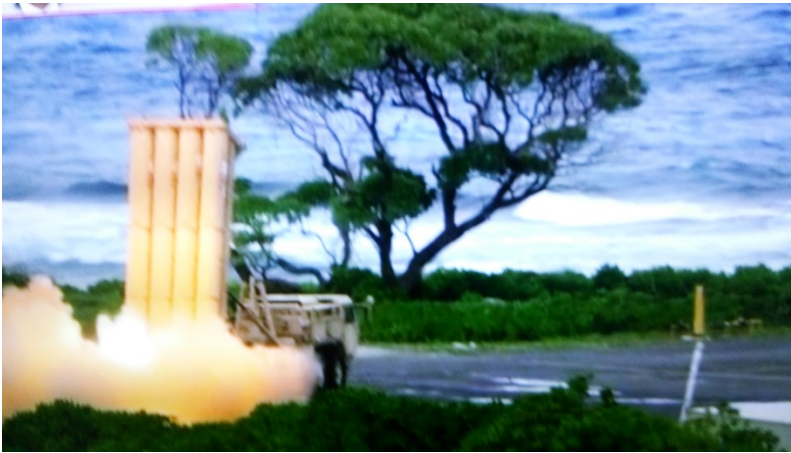
一旦取られた島を取り

返すのは難しい

- 1、朝鮮半島有事が危機のきっかけになろう。日本本土、米軍の支援体制は想定内にあるか。
- 2、住民 3 万人の避難方法は考えられているか。住民の中には島に残り、防衛に貢献したい意志の者もいよう。



- 3、半島からの難民対策、朝鮮半島南、北両方より十万人以上の難民が押し寄せることが予測されよう。中には武装している者も。また対馬には難民キャンプを建設する用地があるとは思えない？
- 4、有効な兵器、地对空ミサイルの一層の配備は地勢的にも日本国全体の安全保障上も必要であろう。



ミサイルの例

- 5、陸・海・空の警戒監視体制の効率化は図られているか。この島は半島情勢を分析するためにはなくてはならない情報を収集できる位置にある。

おわりに：

離島における予想もできない戦闘のなかで一番重要な要素は、日本本土と島との兵站ルート確保であり、空、海、そして陸自第四師団で研修した大規模な医療派遣隊のような部隊も送る必要があり、総合的な自衛隊のもつ力を発揮することが緊要である。

異常



第四師団医療派遣隊

すでに研究は行われ、日米の安保体制に組み込まれていると思うが、昨今の半島情勢は予測もつかない状況に急速に進みつつあるように感じる。

離島防衛は日米安全保障体制と、日本の自衛力の機動性、統合性の成果がなければ不可能でひとつひとつ事案に臨機黄変に対応しなければならぬ。

これが困難な作業であることを、今回の対馬訪問で再認識した。

(以上)

参考文献＊

- |        |                   |
|--------|-------------------|
| 大仏 次郎著 | 「天皇の世紀」朝日新聞社      |
| 佐伯 浩次著 | 「対馬と海峡の中世史」 山川出版社 |
| 大石 学著  | 「江戸の外交戦略」 角川選書    |
| 石井 進著  | 「鎌倉武士の実像」 平凡社     |
| 小林 一岳著 | 「元寇と南北朝の動乱」 吉川弘文館 |
| 田中 政喜著 | 「元寇物語」 青雲書房       |